

# 日本IT書紀

## 086 時代はオートメーション

05 淹滞篇  
卷之十二 滴瀝

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

## 時代はオートメーション

### 一

朝鮮戦争は、日本経済に特需をもたらした。アメリカ軍が日本企業に発注した物資の総額は、二十四億ドルに達したという記録が残っている。一ドル＝三百六十円の固定為替レートで計算すると八千六百四十億円になる。これだけの発注が国内の製造業に集中し、日本経済は好況に沸いた。経済指標で見ると、一九三二年から三六年までの鉱工業生産指数を一〇〇とした場合、一九五一年のそれは一四一・八だった。翌五二年の指数は二〇〇を超え、完全に太平洋戦争前の水準を上回った。

だけでなく、全産業に占める「金属」「機械」「化学」の三業種の割合は、戦前の三八%に対し四五%に拡大した。日本は敗戦から五年で工業国になった。

アメリカ軍の軍需品ばかりでなく、兵器や自動車の修理、基地の建設、南朝鮮への救済物資などに膨大な取引が生じ、繊維、トラック、機関車、鋼材、セメント、サービス部門

の需要が増大した。建設業は重機械を導入して工期の短縮に努め、このためにブルドーザーやクレーンなどの輸入が増加した。国内の自動車メーカーはトラック、バスの増産に着手し、これが周辺産業を刺激した。

戦後一貫して赤字だった国際収支は一転して黒字となり、黒字額は朝鮮特需最盛時の五二年度に八億ドル以上、五〇年代を通して四億―五億ドル台を維持するきっかけとなった。

五一年一月七日に日本銀行が聖徳太子の肖像が入った千円札を発行し、総額二十五億円が市中へ注入された。三月五日には木炭の統制が撤廃され、以後、三月三十一日にイモ類、四月一日にタバコと綿製品、水産物、五月一日に米以外の主食パン、七月に味噌・醤油の統制が廃止された。

小学生や中学生は学校への行き帰りに下を向いて歩いた。道端に落ちていた金属を見つけるためだった。鉄、銅、鉛、錫など「カネヘン」が付くものなら何でも売れた。子どもたちにとってはいよいよ小遣い稼ぎだった。とはいえ、同じ「カネヘン」でもベーゴマや五寸釘は手放すことがなかった。彼らにとつてそれは大切な遊び道具だったからだ。

株式市場も活況を呈した。戦後、株式の売買が再開されたのは一九四九年の五月十六日のことだった。このときの上場銘柄は六十八銘柄に過ぎなかった。翌五〇年六月に二

百二十五銘柄に増え、その平均株価は百七十六円二十銭だった。ところが五三年三月には三百七十八円二十銭をつけていた。二・一四倍である。

この好況で真つ先に証券業界が、十露盤、手廻計算器、PCS（パンチカード式統計会計機械装置）に代えて真空管式の電子計算機を導入し始めた。UNIVAC120である。国際貿易の条件付緩和が重なり、日本企業の機械化、情報化がスタートした。

翌五二年は閏年だった。二月八日に三木武夫（一九〇七〜一九八八、のち第六十六代内閣総理大臣）を主幹とする「改進黨」が結成され、二月二十九日に琉球政府の設立が公布された。アメリカ軍の軍政統治から琉球住民による独自の政府が発足したのは四月一日だった。

初代主席は比嘉秀平（一九〇一〜一九五六、一九五〇年に発足した臨時琉球諮詢委員会の委員長だった）である。幕末まで独立した王国だったということを考えれば、太平洋戦争の最後の激戦地となったのは歴史の不幸だった。

同じ月、「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」のナレーションが始まるNHKラジオドラマ『君の名は』の放送が始まった。有楽町の数寄屋橋で氏家真知子と後宮春樹が繰り返す「すれ違い」のじれったさが、女性の人気を集めた。

岸恵子、佐田啓二の主演で松竹がこれを映画化し、その中で岸恵子が長く幅の広いマフラーをショールのようから巻いた。ヒロインの名から「真知子巻き」と呼ばれ、若い女性のファッションとして流行したのは五三年と記録されている。

## 二

やや時を戻す。

一九四八年から四九年にかけて、終戦直後の混乱がようやく終息すると、GHQは地方の軍政府を縮小し、これに伴ってアメリカ軍のMRUの統合が始まった。MRUが利用していたPCSが日本の政府機関や民間企業に払い下げられたのはこのときである。

それに合わせて四九年六月に日本ワットソン統計会計機械が復活して「日本インターナショナル・ビジネス・マシンス」(日本IBM)が誕生した。そのこともあって、GHQは地方に配置したMRUの主力を東京補給本部(旧東京補給廠)に集約している。併せて東京補給本部を東京の品川から川崎に移した。

四九年の六月、日本IBMを設立するために水品浩、安藤馨、チャールス・デッカーなどがGHQを去った。一方、

北川宗助と島村浩は東京補給本部の業務に忙殺されているうち、ついに日本IBMに復帰する機会を失ってしまう。

朝鮮半島で共産軍とアメリカ軍が一進一退の激戦を展開していた一九五〇年の暮れ、北川宗助は神田司町にあった日本IBMを訪問した。水品から連絡があつて、

「久しぶりに会いたい。相談したいことがある」というのだつた。

二階のオフィスに行くと水品は笑顔で北川を迎え、しばらく雑談のあと、

「立川が拡張される。ついては、君をほしがっている」と切り出した。

「立川」というのはアメリカ空軍極東兵站司令部、いわゆる立川基地のことだつた。

極東兵站司令部は当時、アメリカ空軍のアジアにおける戦略中枢といつていい。このとき立川基地には、零戦の設計者である堀越二郎、九六式陸上攻撃機の設計者である本庄季郎などが「スペシャル・コンサルタント」として招かれていた。

堀越二郎という人物については柳田邦夫著『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』などに詳しい。

本庄季郎という人についても様々な記録や文献があるが、本書ではほとんど初出のため概略を紹介しておく。

本庄は一九〇一年（明治三十四）東京に生まれ、東京帝国大学の工学部を出た。堀越とはほぼ同時期、三菱内燃機（のち三菱重工業）名古屋航空機製作所に技師として採用され、海軍九六式陸上攻撃機や一式陸上攻撃機の設計主務を担当した。アメリカ軍立川補給部に勤務したのち防衛大学教授となりグライダーの設計に従事した。

この人の名を聞いたことがない人でも、日本テレビ系列で放送された「人間鳥コンテスト」は知っているであろう。毎年夏、琵琶湖畔で行われる大会で、当初は「人は空を飛べない」ことを前提に、奇想天外なアイデアや仮装を楽しむのが目的だつた。

ところが一九七七年の第一回大会に同氏の設計による双胴固定翼グライダーが出場して事態が変わつた。その人力グライダーは八二・四メートルを飛行して世界記録を作つた。以後、人の脚力でプロペラを回転させる人力飛行機が次々に開発され、「人力による飛行は不可能」とする定説を覆した。

太平洋戦線でアメリカ軍はランチェスターの法則から戦局を判断して作戦を練り、物量とオペレーションズ・リサーチ（OR）で日本軍航空部隊を圧倒した。その一方で、アメリカ空軍の技術者たちは零式戦闘機や九六式陸上攻撃機の優れた設計に舌を巻いていた。「ホリコシ」と「ホン

「ジョウ」は航空機エンジニアとして世界一流の折り紙つきだった。

アメリカ軍はこの二人を特別顧問に招聘して、朝鮮の戦場で破損した航空機の補修や改良、共産軍航空機の性能分析などに、その知識とノウハウを活用しようとしたのだった。二人は太平洋戦争におけるフランク・マッコイと同じ仕事をした。

次に必要になったのは、信頼するに足るPCSの専門家だった。戦いを有利に展開するには補給を的確に行わなければならなかった。太平洋戦争の成功体験から、補給はアメリカ軍の金科玉条だったとさえいえる。

だが、そのスタッフをわざわざアメリカから連れてくる必要はなかった。GHQの戦略爆撃調査団や東京補給廠本部における実績から見て、日本人スタッフでも十分にこなせるであろう。

——キミの扱いはアメリカ軍将校と同等で、他の日本人スタッフには基地の正面玄関から出入りできる特別なパスポートを交付する。

仕事の内容はというと、PCS業務全般について、であるという。

——人事を含めて全面的にキミに任せたい。アメリカ軍はそういつているが、どうだ。

北川はこの水品の提案を受けることにした。水品からの相談とはいえ、事実上、アメリカ軍の要請だったし、日本IBMに戻ってマシンを販売するより、PCSのサービス業務を事業化することに北川は関心を抱いていた。

——いずれ独立……。  
という思いがあった。

のちに北川は部下たちに

「自分で餌を獲る野鴨になれ」

と口にするようになるが、その決意はこのとき固まったと見ていい。

### 三

立川基地での仕事は東京補給廠本部と大差なかった。物資の在庫管理と出庫管理を一覧表にした「コンソリデイトッド・アベイラビリティ・レポート」、在庫物資の過不足を管理し近い将来を予測して事前に調達するための「デュイン/デューアウト・ステイタス・レポート」および、基地勤務者の給与計算などが中心だった。

唯一、GHQ時代と異なったのは、取り扱い品目とその緊急度だった。補給物資の多くは武器、弾薬、爆弾、医薬品、工具、燃料、軍用車両、補充兵などだった。それを

刻々と変わる朝鮮半島の戦局に応じて手配しなければならぬ。

「扱いは東京都の職員だったが、朝九時から五時まで、という本当の公務員のようなわけにはいかなかった。三シフトの二十四時間体制で、それこそ情報処理部隊のある兵舎は不夜城だった。眠いとか疲れたなんて言っていられなかった」

と、当時、北川の下でオペレーション業務に就いていた宮崎節哉は言う。

立川基地でそういう毎日が繰り返されていた五二年五月一日——日本が独立を獲得した三日後——、血のメーデー事件が発生した。

当時の労働組合員は、満州からの引揚者や予科練の猛者、特攻崩れの乱暴者が少なくなかった。というより、労働者全員が陸軍や海軍に徴兵され、辛酸をなめた経験を持っていた。国家というものに深い不信感を抱いていたのに加え、傾斜生産政策による好不況の偏りや朝鮮戦争特需の恩恵に浴することなくウツプンを蓄積させていた。

史料によると、朝鮮特需の好況は五四年まで続いている。——なぜ労働者が不満を持ったのか。

という疑問を持つ向きも少なくないであろう。敢えて、好況・不況の解説を加えておくと、まず朝鮮特

需で潤った企業が限られていたことをあげなければならぬ。鉄鋼、造船、重機、電機、繊維、化学といった近代工業はなるほど潤った。しかし食品、運輸、軽工業、商業、農漁業、林業など個人消費に直接結びつく産業に特需の陽はわずかししか及ばなかった。

第二に、少なくとも家庭電化製品の市場が広がる一九六〇年代まで、好況・不況は資本家や投資家、金融機関の独占であつて、一般の庶民の暮らしに浸透することがなかった。企業は利益の多くを工場建設に振り向け、工場労働者の賃金を上げたり福利厚生を充実するのは後回しだった。

——会社は儲かっているのに、なぜ賃金が上がらないのか。労働搾取とはこのことではないか。

この不満は当然であろう。不況の影響で日産争議など各地に大規模な労働争議が起こっていた。「賃上げ」を叫ぶデモが街中に繰り出され、労働組合はストライキ、サボタージュで経営側と対峙した。並行して、将来に向けた投資が活発に行われた。

自動車、家電、カメラ、産業用機械といった主要な組立型製造業ではベルトコンベア式の生産設備が積極的に導入され、鉄鋼、石油、化学、電力など装置型製造業ではメカトロニクス式の自動制御システムが急速に普及した。そうした装置には真空管が応用され始めていた。

「オートメーション」

が合言葉だった。

生産現場の機械化、自動化と相まって、事務の合理化がスタートした。最初それは生産に必要な資材の手配や在庫数量の把握、生産計画の立案など、生産現場の機械化、自動化の一環として位置づけられ、次いで工場の要員の管理に広がった。

主な対象業務は勤務体制の編成や就労時間の集計、給与の計算などだった。管理する項目が多く、ソロバンと手廻式計算器ではとても対応できない。

折からGHQの閉鎖が一九五二年六月に迫っていた。さらに国連軍の平壤撤退を機に朝鮮の戦争が休戦に入り、駐留アメリカ軍が規模を縮小しつつあった。このためGHQとアメリカ軍がIBM社との間で結んでいたPCSの契約が解除され、民間に移設することが可能となった。国内企業に大量のPCSが普及した。

例えば日本銀行はGHQ経済科学局が使っていた「IBM405」二セットを導入して、外国為替の統計処理に適用した。三井鉱山では、GHQから移設されたPCSで一人の従業員の給与計算を行った。

東海銀行は専用の「IBM室」にカードパンチ装置十台、集計機二台、分類機などを設置して、事務の集中処理を推

進した。のちに都市銀行や地方銀行、保険会社などが「〇〇事務センター」を開設したが、東海銀行はその先駆的なケースとなった。

五七年四月一日現在で行政管理庁が行った調査によると、PCSの設置台数は百三十八事業所で三百七十セットに急増している。このうちIBM社のPCSは三百二十四セットと、レミントンランド社のマシンを大きく引き離した。

その大半が、GHQやアメリカ軍から日本企業に移設（払い下げ）されたものだった。

小野田セメントや日産自動車、川崎製鉄、日本航空などがPCSの活用についてアメリカ軍立川基地の北川宗助のもとを訪れて指導を仰ぐようになった。中には北川の指導を受けながらIBM社のPCSを採用しなかった企業もあった。

証券業界をはじめ川崎製鉄、近畿日本鉄道、富士銀行などはレミントンランド社のマシンを採用した。日本企業が必要としていたのはPCSにかかわる個々の技術ではなく、統計会計機で事務の機械化を進めるには何から手をつけられるのか、ということだった。

——どの業務をどのように機械化すればいいのか。

——コードを体系化するにはどうすればいいのか。など、まさにノウハウを求めていた。

四

北川は、アメリカ軍基地の勤務が土日休（週休二日）であることを利用して、一九五四年（昭和二十九）から日立製作所亀有工場のPCCS導入を手伝った。日立製作所には、神戸商業大学経営記録講習所の第一回卒業生で、GHQでもPCCSに従事した河野昭三が勤めていた。

戦前・戦中にかけて、北川や島村は神戸商業大学経営記録講習所で講義を行っていた。河野とはそのとき以来、顔見知りの関係にあった。

日立製作所は一九五〇年に全国の工場の人員を整理するのと併せ、生産原価の直間率を改善するため、経営の機械化を検討した。その結果、まず亀有工場に「IBM室」を設置して原価管理に適用しようとしていた。計算機を設置している部屋を一律に「IBM室」と呼んだのが、いかにも当時らしい。

導入したPCCSはアメリカ軍が契約を解除したIBM405だったが、従来の手作業を計算機に移行したにすぎず、しかも一部の業務に手作業が残っていた。このため、帳簿の転記が重複するなどの問題が起こっていた。コンピュータ処理と手作業の処理が併存すれば、かえって煩雑になる

のは古今東西の別を問わない。

そこで北川は、管理業務や事務処理の流れそのものを改善することを提案し、清成迪工場長を室長とする企画室を設置した。また立川基地から今村栄喜、松原友夫、金抜尚信、戸川正夫、吉野豊、志賀英男などを引き連れて実務に従事させた。

一九五五年の十月に、アメリカ空軍極東兵站司令部の指令で渡米した北川宗助の「見聞録」は、当時の日本人から見たアメリカ産業界を端的に表わしている。その本文引用する。（『情報産業・この道六十年』中に収録）原文ママ）

ウエキー島で飛行機を降りエアポートからバスで昼食のため米軍専用のレストランまで案内してもらいましたが、そのスピードの速いのに驚きました。なにしろそのころの東京のバスといったら、のろのろ運転でしたからね。

レストランの中には煙草の自動販売機があり、はじめて使いましたが、その便利なことには驚きました。まだわが国にはありませんでしたから。また品川の補給廠時代の上級軍属だったエミール・ファロンクさんに案内していたのだとき、自動販売機から紙コップのコーヒーが取り出せるのにも驚きました。全くのオノポリさんで、見るもの聞くものすべて目新しく文化の違いにとまどいました。



アメリカ本土に着くと、まずカリフォルニア州のサクラメント（州の首都）アンダーソン・エアベース（基地名は功績のあった人の名で呼ぶ）に行き、その基地のシステムや機械設備、作業状況などを視察しました。そこには品川の補給廠にいたクリステッセン嬢がおられ、マシントームの見学などに、いろいろな便宜をはかってくれました。

オハイオ州のデイトンにあったAMC（AIRMAT ERIAL COMMAND II 空軍補給司令部）を視察したとき、IBM社とRR社の機械があり、納税の関係で両社の機械を公平に使うのだということでした。

ここで感心したのは、各業務のマニュアルがイラスト入りで、誰れにでも解るように、興味を持たせながら説明してあることでした。

この視察は、極東兵站司令部の情報処理を任せている北川に、アメリカ本土における空軍での電子計算機利用状況とともに、同軍が構築を進めていた新システムを周知させるのが目的だった。このためアメリカ軍は、トランシーバーで電子計算機のデータを電送し、遠隔地間でデータ交換を行うデータ・トランシーバー・システムなど、最新技術を北川に披露している。

ただし、北川は島村浩などと共同で「日本ビジネス」の設

立準備に取り掛かっていた。そのことはすでに、アメリカ軍極東兵站司令部に通知していたわけで、構築中の新システムを視察させることは機密の流出につながりかねない。とすれば、この訪米視察は、北川の長年の功に報いるために下した命令だったのではないか、という想像を許すであらう。

## ~~~~~ 補注 ~~~~~

**株式売買の再開** GHQは証券業界に経営の近代化を求め、それを条件に売買の再開を認可した。このため証券業界はアメリカに視察団を派遣し、これが戦後日本における計算機の利用に弾みをつけた。

**比嘉秀平** ひが・しゅうへい/1901~1956。沖縄の貧農の家に生まれ、九歳のとき砂糖を運ぶトラックに轢かれて右腕を失った。二五年早稲田大学を卒業し、中学校の英語教師を務めたあと二八年に沖縄に戻った。以後、県立二中の教師を務めたが、恩師・志喜屋孝信が沖縄民政府知事となったのを機に民政府に入った。第二次大戦後の五一年、アメリカ軍政府から琉球臨時中央政府主席に任命された。

**数寄屋橋** 現在は埋め立てられてしまったが、江戸・寛永のころ江戸湾から引き入れた運河が流れていた。現在は公園となった跡地にそのことを伝える石碑が建っている。

**堀越二郎** 第五十三「大陸」補注

**鳥人間コンテスト** そもそもはイギリスでジョークとして行われていた「セルシー鳥人間ラリー」(Selasy Bird - Man Rally)。日本大会の第一回は一九七七年七月二日に行われ、三十七人(組)が出場した。

**人力飛行機の記録** 一九九八年八月一日に行われた第二十二回鳥人間コンテストでチームエアロセプシーが二万三千六百八十八メートル二十四センチを記録し、当分は破られない大記録とされた。ところが二〇〇三年七月二十七日に行われた第二十七回大会で日

本大学理工学部航空研究会が三万四千六百五十四メートル十七センチを記録している。三十キロ以上もの距離を人力で飛行できるというのは、おそろしい脚力といわなければならない。

青山のボウリング場 神宮球場と秩父宮ラグビー場の間、都立青山高校の旧正門前にあった。現在はそこに展示会場「TEPIA」が建っている。

**IBM室** 導入した計算機のメーカーがレミニトシランド社であっても、日本の企業はその設置場所を「IBM室」と呼んだ。化学調味料を「味の素」、光学式複写機を「ゼロックス」、ステープラーを「ホットキス」というのに等しい。

**朝鮮戦争** 大韓民国軍と国連軍は一時、半島南端の釜山まで追い詰められた。韓国政府の指令が届くのは釜山周辺と済州島に過ぎなかった。文字通りあと数歩で海の中に落ちるところだった。ところが韓国軍と国連軍はからくも踏みとどまり、「北朝鮮」軍は詰め寄れなかった。

**トルーマン大統領**がマッカーサーに日米講和交渉の開始を指示した翌日——一九五〇年の七月七日——、日本に駐留していたアメリカ陸軍第八軍の七個師団七万五千人がソウルの南西五十キロの仁川(インチョン)、群山(クンサン)に上陸した。

さらに第二次世界大戦でアメリカ軍の主力だった「M4シャーマン」、イギリスの「クロムウェル」、ソ連製「T-34」に対抗し得る「M26パーシング」(アメリカ)、総重量五十トンを誇る「セントリーオン」(イギリス)といった最新鋭の重戦車と支援車両を前線に送り込んだ。

これが戦争の勢いを変えた。

この戦争で初めて姿を現したソ連製ジェット戦闘機「ミグ15」

は最初、アメリカ軍のジェット戦闘機「F-84G」(サンダーバード)を圧倒した。対してアメリカ空軍が最新鋭の「F-86F」(セイバー)を投入して制空権を奪回した。結果、兵站が伸びきっていた「北」軍は背後の補給路を絶たれ、にわかに北転した。「背」という文字は人の体の裏側であることから「後ろ」「裏」の意味を持つ。転じて目が届かない場所、裏切り、離反といった意味にも使われる。「逃げる」の意味もある。

それは「北」という文字が入っているからであるらしい。なぜかという、しばしば北から長城を超えて侵寇した胡族が北に向かつて逃げたからである。そこで中国の古典では、敗走することを「北走」ともいう。

「北朝鮮」軍はまさに北に向かって走った。

勢いを得た韓国軍と国連軍は再び三八度線を確保し、さらに平壤に迫った。マッカーサーは

——クリスマスまでに一大攻勢をかけ、新年には戦いに勝利できるだろう。

と楽観的な見方を示していた。

ところが十月末にいたって進軍がピタリと停滞した。中国義勇軍が「抗美援朝」を標榜して参戦したのだ。「美」とはアメリカ(中国では「美利堅」と表記)を指す。

中国共産党政府はその直前、インドネシア政府を通じて「中国はアメリカ合衆国政府の帝国主義に断固とした態度をとる」と警告を発していた。

アメリカ政府はその警告を軽視した。中国が送り込むのは正規軍ではなく、せいぜい数千人の義勇兵であろう。ところがその実態は林彪が総指揮をとる第四野戦軍十八個師団二十六万人だった。

義勇軍は戦車も大砲も持っていないが、肉弾戦で迫ってくる勢いに、国連軍は一度占拠した平壤を放棄せざるを得なくなった。マッカーサーは「クリスマス総攻撃」どころか逆に退却に追い込まれ、五一年の一月、中国第四野戦軍によってソウルが再び占領されてしまった。

三月十四日、国連軍はソウルを再び奪還したが、三八度線は喜んで戦況は膠着し、ソ連国連代表・マリクの提案など停戦の動きが開始された。このときアメリカ政府の内部で朝鮮戦争の幕引きをめぐる意見の対立が表面化した。

大統領トルーマンは「原爆を落とせ」と言った。

太平洋戦争で日本が降伏したように、北朝鮮や中国共産党政府は原爆の前に沈黙するであろう。原爆で戦争を終結させることができれば、これ以上に戦火は広がらない。

トルーマンが怖れたのはソ連軍の参戦だった。

第三次世界大戦だけは回避しなければならない。対してマッカーサーは

——満州を爆撃し中国を海上封鎖すべきである。

と主張した。生粋の陸軍軍人である彼は、

——戦争というものは敵の領土内に兵を進め、首都を制圧し、戦争首謀者を処刑し、政治・経済を掌握して初めて勝利することができる。

と考えていた。

原爆で戦いは終わるかもしれないが、勝利ではない。かつ、原爆を三度使えば、アメリカ合衆国は永遠に拭い去ることができない汚点を残すであろう。どちらにも一分の理があり、一分の非があった。

四月十一日、トルーマンはマッカーサーを解任した。国連軍の総司令官は第八軍司令官のリッジウェーに代わった。板門店で休戦協定が成立したのは開戦から約三年後の五三年七月二十七日である。

**朝鮮戦争における連合国軍** 一九六三年に発表された『韓国エンサイクロペディア』によると、朝鮮戦争の連合国軍は、次のような諸国で構成されていた。カッコ内は死亡者の数なので、彼らが決して後方支援に限っての参戦でなかったことが分かる。

オーストラリア(死者291)／ベルギー／ルクセンブルグ(97)／カナダ(291)／コロンビア(140)／エチオピア(120)／フランス(288)／ギリシア 1690／オランダ(11)／ニュージーランド(34)／フィリピン(92)／タイ(114)／トルコ(717)／南アフリカ(20)／イギリス(710)。トルコ、コロンビア、南アフリカ、ギリシア、タイ、フィリピン、エチオピアなどが軍隊を派遣していたというのは、意外でもある。

**朝鮮戦争の戦死者数** 韓国軍は百三十一万人の兵力のうち四十一万五千人を失い、アメリカ軍は十五万七千人の兵を投入して五万四千人の戦死者を出した。全体の戦死率三一・八%というのは、第二次大戦における日本軍のインパール作戦にも匹敵する。ジェット機と戦車とロケット砲などを駆使した機械化戦争であったために、はじめはじめした悲惨さがなかった。だが実態は大規模な消耗戦だった。

**戦車「M4シャーマン」** 第二次大戦中に約五万輛が生産され、連合国軍を勝利に導いた。一〇五ミリ榴弾砲を搭載し、可動式のサスペンションを採用、空冷星型九気筒四サイクルの独特の

エンジンを備え、最高速度四十キロ／時とソ連の「T-34」には劣ったが、平均六十五ミリの装甲と「T-34」の一・五倍を搭載した砲弾のおかげで、防備と物量で形勢を逆転した。太平洋戦線での戦車に出会った日本軍はたちまち壊走した。

**戦車「クロムウエル」** イギリス陸軍の第二次大戦における主力戦車だった。基本的には装甲偵察連隊で使用されたが、第七機甲師団の戦車旅団もこの戦車を装備した。一九四四年から実戦に投入されたが装甲、火力ともに貧弱で、この反省に立って開発されたのが「センチュリオン」である。

**戦車「M26パーシング」** アメリカ陸軍が開発し四五年一月、第二次大戦ヨーロッパ戦線に「戦場試験」の名目で二十輛が投入された。四五年四月までに三百十両が生産され二百輛が実戦に参加した。生産は四五年末まで続けられ実戦配備は一千六百二十一輛、試作や各種型を含めると約二千輛が生産された。時速四十八キロ、七十六・二ミリ砲を搭載していた。太平洋戦線では四五年四月の沖繩戦に二十輛が投入され、朝鮮戦争ではソ連製の戦車「T-34」と白兵戦を行った。至近距離から砲弾を受けても装甲が破れなかった。

**戦車「センチュリオン」** 第二次大戦中にイギリスが開発した戦車で、ナチス・ドイツ軍の「タイガー」「パンサー」といった重量級戦車に対抗するのが目的だった。しかし試作機が完成したときナチス・ドイツが降伏したため、朝鮮戦争が最初の実戦投入となった。主砲は八十三・四ミリの二十ポンド砲を備え、総重量は五十トンもあった。

**F-84 G** 一九四四年に設計が開始され四七年に部隊配備された。「サンダージェット」と呼ばれ朝鮮戦争では対地攻撃に使用さ

れた。

F-106 F 一九四五年にノースアメリカン社で開発され朝鮮戦争でソ連製ミグ 15 と史上初のジェット機同士の空中戦を展開した。航空自衛隊でも五年から運用を始め、翌年には三菱重工業でライセンス生産が始まった。最終的に三百機以上が生産され八二年まで使用された。航空自衛隊の曲芸飛行隊「ブルーインパルス」が使用したことも知られる。

林彪 Lin Biao / りん・びょう / 1908 ~ 1971。本名は林育容。一九二三年社会主義青年団に入り二五年黄埔軍官学校卒後、国民革命軍第十二師葉挺独立連隊で小隊長、中隊長を経て毛沢東と合流、長征に参加した。労農紅軍第四軍軍団長、紅軍大学校長などを務め、抗日戦では八路軍一一五師を率い、四九年中華人民共和国建国後は中央人民政府委員、中南军区司令員、党中央軍事委副主席、朝鮮戦争の中国軍を指揮した。五五年に十大元帥の一人となり、五九年彭徳懐が失脚すると軍部を掌握した。

文化大革命では「毛主席の親密な戦友」として六九年の九全大会で党副主席、のち国家主席の就任を毛沢東に拒否された。七一年九月毛沢東暗殺を企てて失敗しソ連に逃れるために乗った飛行機が外モンゴルで墜落して死亡したとされる。

# 日本IT書紀 086 時代はオートメーション

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。